

# パーソナリティ(Big Five)からみた『日本書紀』の構造の検討 —『日本書紀』編纂 1,300 年によせて—<sup>1</sup>

水野 邦夫

## 問題

パーソナリティ研究において広く受け入れられている理論のひとつに「5 因子モデル(以後、Big Five という)」がある。これは特性論研究において、因子分析などの手法を用いて人が共通して持つパーソナリティ特性を集約すれば、5 つの特性にまとめることができることを示したものであり、1980 年代ごろには、「外向性(Extroversion)因子」、「情緒不安定性(Neuroticism)因子」、「誠実性(Conscientiousness)因子」、「調和性(Agreeableness)因子」、「開放性(Openness)因子」の 5 因子を基本的な因子とする研究が再び注目され、確固たる知見を積み重ねて現在に至っている(和田, 1996)<sup>2</sup>。

Big Five が注目される大きな理由として、まず、これらの特性の存在が、多少の表現は異なるものの、通文化的・通言語的に広くみられることが指摘されている(萩生田, 2010)ことが挙げられよう。また、行動遺伝学的研究において一卵性双生児(遺伝情報をほぼ 100%共有)と二卵性双生児(同約 50%共有)の Big Five 各特性の類似度(級内相関係数)に大きな違いがみられること(Shikishima, Ando, Ono, Toda, & Yoshimura, 2006)や、Big Five と脳活動の関連性を示唆する研究も進められていること(国里・岡本・岡田・山脇, 2010)など、Big Five の遺伝・生物学的基盤との関連性がいくつか指摘される点も挙げることができよう。

ここで、もし Big Five が通文化・通言語的であり、なおかつ遺伝・生物学的な基盤を持ちうるものであるならば、Big Five は時代を超えた枠組みである可能性が考えられる。もしそうであれば、われわれの価値観は時代とともに刻々と変容し、現代の価値観で過去を推し量ることが危険であることはしばしば指摘されるところではあるが、このような時代を超えた枠組みを用いることで、過去の世界を読み解くことが期待できるかもしれない。それはたとえば、歴史上の人物のパーソナリティ像を Big Five を通して心理学的に分析することで、歴史学のような過去を探究する学問にも心理学が何らかの発見や貢献を提供することなどが考えられる。より具体的には、歴史(文献)上の人物像を Big Five の観点から評価することで、当時の人々の行動様式を推測し、当時(少なくとも文献)の時代精神を推測することができるかもしれないということである。本研究は、そのような未知の期待に一縷の望みを託しつつ、研究することを目標とするものである。

ところで、本稿を執筆している令和 2(2020)年は、わが国に現存する最古の正史である『日本書紀』が舎人親王らによって編纂されてから、ちょうど 1300 年目の節目に当たる。『日本書紀』は神代から第 41 代持統天皇までのわが国の歴史を記したものであるが、とりわけ人代巻(神武～持統)においては、天皇を中心に登場人物の性格や行動傾向などの記述が散見される。そこでこれらの点に注目し、本研究では、『日本書紀』に登場する人物の性格的描写を収集し、それを Big Five の観点から評定、分析することで、パーソナリティからみた『日本書紀』の構造を明らかにすることを検討することを目的とした。

なお、この試みはすでに水野(2009)において行われているが、調査対象者数が少ないことや分析手法が適切とはいえないことなどの問題点が挙げられる。そこで、本研究では調査対象者数を増やし、分析手法も改めるなどしたうえで再検討を行った。

## 方法

### パーソナリティ関連語句の収集・選定

調査に先立ち、パーソナリティ関連語句の収集・選定作業を行った。『日本書紀』の巻第三(神武天皇)から巻第三十(持統天皇)までの中に登場する人物<sup>3</sup>について、性格や行動傾向、個人的好みなどを形容していると思われる単語または語句を、著者の判断で計 136 語収集した。なお、収集にあたっては、原文は坂本・家永・井上・大野(1994, 1995)を典拠とし、宇治谷(1988)を基礎に、適宜、坂本他(1994, 1995)や金田一・金田一・見坊・柴田・山田(1974)、久松・佐藤(1963)、長澤(1969)、松村(1995)を参照しつつ収集語の口語訳を行い、表現が異なるが意味がほぼ同じであるもの、意味が広くあいまいなもの、特殊な場面で見られる行動傾向、文脈の中では理解できてもその箇所だけを抜き出すと分かりづらいものなどを整理し、最終的に 79 の単語・語句をパーソナリティ関連語句とした。これらについては Table 1 に示す。

### 調査対象者

20XX 年および 20XX+6 年～20XX+11 年に近畿圏の大学院で心理学を専攻した大学院生 68 名(男子 26 名、女子 42 名)に対し、下記質問紙調査への回答を依頼した<sup>4</sup>。

### Big Five の意味・定義に関する資料

調査対象者に Big Five の各特性の意味や定義をできる

Table 1 選出されたパーソナリティ関連語句

番号	単語	原文の例
1	戦いのかげひきをよく知っている	武略(たけきたばかり)有り〔巻第22 推古紀〕
2	か弱(よわ)い	手弱女人(たをやめ)なり〔巻第6 垂仁紀〕
3	威厳がある	志尚沈毅し(みこころざしおごごし)〔巻第4 綏靖紀〕
4	老人を敬う	老(おきな)を敬ひ〔巻第19 欽明紀〕
5	聡明だ	聡く達(とほ)りたまふ〔巻第5 崇神紀〕
6	素直だ	朴素(すなほ)なり〔巻第3 神武紀〕
7	謙遜する	謹慎(つつし)みて〔巻第5 崇神紀〕
8	文筆を愛する	文筆(ふみつくること)を愛(この)みたまふ〔巻第30 持統紀〕
9	心が広い	寛博(ひろ)く〔巻第5 崇神紀〕
10	立ち居振る舞いがきちんとしている	進止(みふるまひ)軌制(をさをさ)し〔巻第22 推古紀〕
11	暴悪だ	暴(あら)く悪しき〔巻第29 天武紀下〕
12	しっかりしている	確(かた)くつよ(かたくつよ)ます〔巻第3 神武紀〕
13	忠勇である	忠(いさをし)ありて且(ま)た勇(いさみ)あり〔巻第3 神武紀〕
14	疑い深い	疑(うたがひ)多し〔巻第24 皇極紀〕
15	賢人を敬う	賢(さかしき)を礼(あやま)ひたまひ〔巻第17 継体紀〕
16	気がきかない	情性(ひととなり)拙し〔巻第13 安康紀〕
17	ひねくれている	復恨(いすかしま)もとりて〔巻第3 神武紀〕
18	人を愛する	士(ひと)を愛で〔巻第17 継体紀〕
19	清らかですっきりしている	器宇(うつはもの)清く通りて〔巻第18 宣化紀〕
20	節度があつて美しい	有順(みさをか)なる〔巻第26 斉明紀〕
21	有能だ	弁才(わきわきしこと)有り〔巻第22 推古紀〕
22	悪賢くて誠意がない	奸(かだましき)猾(やつこ)〔巻第17 継体紀〕
23	自分の分別にしがみついている	心を以て師(さかし)としたまふ〔巻第14 雄略紀〕
24	強く勇ましい	武芸人(たけきわざひと)に過ぎたまふ〔巻第4 綏靖紀〕
25	母のような徳がある	母儀(おもたる)徳(いきほひ)有(ま)します〔巻第30 持統紀〕
26	賢い	明達し(さかし)〔巻第3 神武紀〕
27	幼少の者を慈しむ	少(わかき)を慈(うつくし)び〔巻第19 欽明紀〕
28	礼儀を好む	礼(あや)を好みて〔巻第30 持統紀〕
29	卑怯者だ	虜(いやしきやつこ)〔巻第3 神武紀〕
30	大きいはかりごとを好む	雄略(ををしきこと)を好みたまふ〔巻第5 崇神紀〕
31	才能や地位で人におごらず王者ぶらない	才地(かど)を以て、人に矜(おご)りて、王(おほきみおもへり)したまはず〔巻第18 宣化紀〕
32	徳が高い	聖と作(ましま)す〔巻第6 垂仁紀〕
33	人々をいたわり養う	群庶(もろひと)を勉勞(いたは)り、万民(おほみたから)を養育(やしな)ひたまふ〔巻第19 欽明紀〕
34	悪賢い	黠(さと)き〔巻第3 神武紀〕
35	学者を好む	儒(はかせ)を好みたまふ〔巻第25 孝徳紀〕
36	さまざまな極刑を見るのを好む	凡そ諸の酷刑(からきのり)、親(みづか)ら覽(みそな)はさずといふこと無し〔巻第16 武烈紀〕
37	知識が豊富である	識(さと)り多し〔巻第15 仁賢紀〕
38	性行為を望まない	交接(とつぎ)の道(を)欲(おも)はず〔巻第7 景行紀〕
39	臆病だ	懦(おちな)く弱くして〔巻第14 雄略紀〕

40	物事を深く遠くまで見通す	玄(はるか)に監(みそなは)すこと深く遠し〔巻第10 応神紀〕
41	評判と人望を集める	嘉(よ)き声(な)を擅(ほしきまま)にし〔巻第19 欽明紀〕
42	男らしい	雄拔(をを)しき氣有(い)します(い)さ(ま)します〔巻第4 綏靖紀〕
43	忠実で正しい	忠正(ただ)しく〔巻第24 皇極紀〕
44	人の道に反する	仁義(うつくしびことわり)に乖(そむ)けり〔巻第4 綏靖紀〕
45	凶暴だ	暴(あら)び強(こは)し〔巻第7 景行紀〕
46	へりくだる	儉下(へりくだ)りたまへり〔巻第13 允恭紀〕
47	訴えごとを裁くのがうまい	獄(うたへ)を断(た)ることに情(まこと)を得たまふ〔巻第16 武烈紀〕
48	頭の働きがすばらしい	才(かど)敏(と)くして〔巻第15 仁賢紀〕
49	度量の広い	大度(おおきなみこころ)います〔巻第6 垂仁紀〕
50	文章や史学を愛する	文史(しるしふみ)を愛(この)みたまふ〔巻第20 敏達紀〕
51	勢いが強い	威(いきほひ)〔父(かぞ)より〕勝(まさ)れり〔巻第24 皇極紀〕
52	裁きごとや処罰を好む	刑理(つみなへことわること)を好(た)まふ〔巻第16 武烈紀〕
53	慎み深い	謹慎(つつし)みて〔巻第5 崇神紀〕
54	親孝行だ	孝性(おやにしたがふひととなり)純(もはら)に深く〔巻第4 綏靖紀〕
55	うぬぼれている	侮(あなづ)り慢(おご)りて自らを賢(さか)しとおもへり〔巻第17 継体紀〕
56	愚かだ	愚(おろか)なり〔巻第13 允恭紀〕
57	すぐれている	穎(すぐ)れ〔巻第19 欽明紀〕
58	道徳に背く	徳(いきほひ)を敗(た)りて道に反く〔巻第17 継体紀〕
59	あわれみ深い	務(つとめ)、矜(かなし)び宥(なだ)めたまふに存(ま)します〔巻第19 欽明紀〕
60	恨みは必ず晴らす	怨(あた)を見ては必ず報(む)ゆ〔巻第7 景行紀〕
61	穏やかだ	謙(くだり)温(なだ)めやはら(う)つくしびます〔巻第15 仁賢紀〕
62	聖人のような知恵を持っている	聖(ひじり)の智(さと)り有り〔巻第22 推古紀〕
63	飾ったりするところがない	矯(なほ)し飾(か)る所無(な)し〔巻第6 垂仁紀〕
64	落ち着きのある	深沈(しめやか)にして〔巻第30 持統紀〕
65	徳のある	徳(おむおむ)しく有(あ)ります〔巻第14 雄略紀〕
66	まっすぐで明るい	明直(をさをさ)しき心〔巻第25 孝徳紀〕
67	人の道に外れた	猷(あや)しき心有(あ)り〔巻第7 景行紀〕
68	身を慎む	己(おの)を剋(せ)め躬(み)を勤(つと)めて〔巻第6 垂仁紀〕
69	傲慢だ	傲(もと)り〔巻第17 継体紀〕
70	心が広く思いやりがある	寛(ゆるらか)に和(やはらか)にして〔巻第19 欽明紀〕
71	先々のことまで見通す	未然(ゆくさきのこと)を知(し)るしめす〔巻第22 推古紀〕
72	気が弱い	懦(つたな)く弱(よ)くして〔巻第4 綏靖紀〕
73	恵み深い	仁(めぐみ)慈(あま)恵(あま)ます〔巻第11 仁徳紀〕
74	いろいろな悪事を行う	頻(しきり)に悪(あしきこと)を造(し)たまふ〔巻第16 武烈紀〕
75	正直だ	真(まこと)に任(まか)せて〔巻第6 垂仁紀〕
76	勇敢だ	勇(は)り〔巻第6 垂仁紀〕
77	恩を忘れる	恩(めぐみ)を承(う)けては忘(わ)す〔巻第7 景行紀〕
78	貞操を守り清らかだ	貞潔(いさぎよ)し〔巻第7 景行紀〕
79	筋が通っている	明(あきらか)にして〔巻第6 垂仁紀〕

だけ正確に理解させるために、村上・村上(2001)をもとに、「ビッグファイブ各特性の特徴」と称する資料を作成した。資料の内容を Table 2 に示す<sup>5</sup>。

Table 2 ビッグファイブ各特性の特徴

<b>外向性</b>
にぎやかで、元気がよく、話し好き、勇敢で、冒険的、積極的な性格である。
逆の場合は おとなしく、無口で、引っ込み思案、臆病で、不活発な性格である。
<b>協調性</b>
温かく、誰にでも親切な、愉快で、人情の厚い、気前のよい、協調性の高い性格である。
逆の場合は 不親切で、冷たく、利己的、疑い深い、非協力的な、協調性に欠ける性格である。
<b>勤勉性</b>
責任感があって、仕事や勉強に良心的・精力的に取り組む、勤勉な性格である。
逆の場合は 物事への取り組みが中途半端で、根気がなく、気まぐれで、浪費癖がある、無責任で、いい加減な性格である。
<b>情緒安定性</b>
気分が安定していて、不平不満がなく、気楽で、嫉妬深くない、理性的な性格である。
逆の場合は 気分が不安定で、悩みやすく、神経質で、嫉妬深く、感情的になったり、怒りっぽい性格である。
<b>知性</b>
好奇心があって、知識の範囲が広く、物事を分析したり考えたりする、思慮深い、創造的、知性的な性格である。
逆の場合は 好奇心に乏しく、物事を分析するのが苦手で、頭がすぐに混乱しやすい、知性に乏しい、素朴で、洗練されていない性格である。

## 質問紙

各パーソナリティ関連語句が Big Five の各特性とどれくらい関連するかを調べるために、語句ごとに「(各特性が高い(5)から「低い(1)」までの 5 段階で評定(すなわち、1つの語句について、各特性との関連を評定)できる質問紙を作成した。

なお、回答方法の理解を深めることと、調査対象者が Big Five 各特性の意味をどれくらい正確に理解しているかを確認することを目的に、上記以外に練習試行用の質問紙を作成した。作成にあたり、和田(1996)の Big Five 尺度項目のうち、各因子への因子負荷量の絶対値が低いものを 2 項目ずつ選び出し、同様の評定ができるようにした。敢えて低いものを選んだのは、判断の難易度を高めることをねらいとしたためである。練習試行用の質問紙は 2 種類からなり、一方の質問紙(以後、練習用シート 1 という)は「意思表示しない(外向性が低い項目)」および「自己中心的な(協調性が低い項目)」の 2 項目について、もう一方(同、練

習用シート 2)は「反抗的な(協調性が低い)」、「几帳面な(勤勉性が高い)」、「独立した(知性が高い)」、「呑み込みの速い(知性が高い)」、「憂鬱な(情緒安定性が低い)」、「飽きっぽい(勤勉性が低い)」、「地味な(外向性が低い)」、「くよくよしない(情緒安定性が高い)」の 8 項目について、それぞれ評定できるようにした<sup>6</sup>。

## 手続き

調査は授業時間の一部を利用して行った。はじめに、調査対象者に調査への回答を依頼した。その際、回答したくない場合はいつでも回答を拒否することができる旨を伝えた。次に、調査対象者にビッグファイブ資料を配付し、熟読のうえ各特性の特徴をイメージするように指示し、2~3 分の時間を与えた。

次に、これからパーソナリティを表す単語や語句について、それぞれが Big Five の各特性の要素をどれくらい持っていると思うかを評定してもらうよう説明し、「ひょうきんな」という語を提示して評定の仕方を例示し、これから配付する語句について、同様の評定をするように伝えた。その後、練習用シート 1 を配付し回答を求め、回収後に回答方法等について疑問がないかどうかを尋ねた。つづいて、練習用シート 2 を配付し回答を求め、回収後に再度同様の確認を行った。

その後、本調査の質問紙を実施したが、回答にあたっては、他の評定者と回答が違っていても気にする必要がないこと、先に配付した Big Five 資料を随時参照してもよいこと、語句の意味を理解しがたい場合は、インターネット上の国語辞典等を参照してもかまわないこと、他の評定者がどのような回答をしたかは見ないこと、疲れた場合は適宜休憩を入れてもかまわないので自分のペースで回答すること、などを教示した。なお、回答に要した時間は、だいたい 30~35 分程度であった。

回答終了後、デブリーフィングとして研究目的を説明し、研究への理解とデータ使用の承諾を求めた。

## 結果

本調査において回答に記入漏れがあった者(7 名)、練習用シート 1 または 2 で記入漏れがあり、Big Five に対する理解度が確認できなかった者(1 名)、および情緒安定性

Table 3 ストレス値および決定係数

次元	1	2	3	4	5
ストレス値	.150	.069	.028	.017	.016
決定係数	.946	.984	.997	.999	.999

Table 4 各語句の次元値

No.	語句	I	II	III	No.	語句	I	II	III
1	戦いのかけひきをよく知っている	1.107	0.321	0.690	41	評判と人望を集める	1.823	-0.748	0.409
2	か弱(よわ)い	-1.634	0.284	-0.721	42	男らしい	0.667	-0.322	0.279
3	威厳がある	0.424	0.435	0.824	43	忠実で正しい	1.228	0.358	-0.259
4	老人を敬う	1.280	-0.535	-0.083	44	人の道に反する	-2.962	-0.372	-0.006
5	聡明だ	1.446	0.502	0.280	45	凶暴だ	-3.202	-0.827	0.453
6	素直だ	0.761	-0.801	-0.040	46	へりくだる	-0.747	-0.028	-0.737
7	謙遜する	0.258	0.110	-0.604	47	訴えごとを裁くるのがうまい	1.280	0.378	0.368
8	文筆を愛する	0.265	1.269	-0.189	48	頭の働きがすばらしい	1.048	0.875	0.264
9	心が広い	1.494	-1.046	-0.180	49	度量の広い	1.418	-0.748	-0.074
10	立ち居振る舞いがきちんとしている	1.568	-0.092	0.185	50	文章や史学を愛する	0.315	1.483	-0.104
11	暴悪だ	-2.839	-0.873	0.545	51	勢いが強い	-0.368	-0.988	0.968
12	しっかりしている	1.443	0.133	0.108	52	裁きごとや処罰を好む	-1.807	0.379	0.137
13	忠勇である	1.303	-0.376	0.217	53	慎み深い	0.702	0.370	-0.732
14	疑い深い	-1.811	1.147	0.066	54	親孝行だ	1.177	-0.277	-0.278
15	賢人を敬う	0.822	0.382	0.066	55	うぬぼれている	-1.640	-0.948	0.262
16	気がきかない	-2.356	-0.145	-0.397	56	愚かだ	-2.814	-0.980	-0.292
17	ひねくれている	-2.394	0.598	-0.225	57	すぐれている	1.447	0.442	0.103
18	人を愛する	0.960	-0.995	0.037	58	道徳に背く	-2.844	-0.283	-0.078
19	清らかですっきりしている	0.975	-0.233	-0.185	59	あわれみ深い	0.432	-0.300	-0.611
20	節度があって美しい	1.414	-0.205	0.178	60	恨みは必ず晴らす	-1.727	0.389	0.769
21	有能だ	1.411	0.556	0.417	61	穏やかだ	1.104	-0.602	-0.819
22	悪賢くて誠意がない	-1.679	0.418	0.724	62	聖人のような知恵を持っている	1.504	0.707	0.008
23	自分の分別にしがみついている	-2.183	0.433	0.076	63	飾ったりするところがない	0.475	-0.569	-0.357
24	強く勇ましい	0.986	-0.559	0.394	64	落ち着きのある	1.068	0.075	-0.781
25	母のような徳がある	1.404	-0.505	-0.308	65	徳のある	1.490	0.091	-0.055
26	賢い	0.926	1.117	0.246	66	まっすぐで明るい	1.253	-1.247	0.302
27	幼少の者を慈しむ	1.075	-0.737	-0.225	67	人の道に外れた	-2.935	-0.215	0.057
28	礼儀を好む	0.990	0.148	-0.189	68	身を慎む	0.103	0.387	-0.584
29	卑怯者だ	-2.288	0.146	0.233	69	傲慢だ	-2.301	-0.468	0.426
30	大きいばかりごとを好む	-0.618	-0.258	0.621	70	心が広く思いやりがある	1.516	-0.816	-0.278
31	才能や地位で人におごらず王者ぶらない	1.754	-0.156	-0.041	71	先々のことまで見通す	1.101	0.656	0.249
32	徳が高い	1.788	0.205	-0.131	72	気が弱い	-1.750	0.433	-1.103
33	人々をいたわり養う	1.607	-0.394	-0.353	73	恵み深い	1.006	-0.488	-0.389
34	悪賢い	-0.990	0.328	0.806	74	いろいろな悪事を行う	-2.238	-0.305	0.578
35	学者を好む	-0.078	1.279	0.146	75	正直だ	0.490	-0.295	-0.067
36	さまざまな極刑を見るのを好む	-2.141	0.223	0.166	76	勇敢だ	1.077	-0.761	0.489
37	知識が豊富である	0.916	1.012	0.441	77	恩を忘れる	-2.424	-0.643	-0.248
38	性行為を望まない	-1.342	0.644	-0.531	78	貞操を守り清らかだ	0.068	0.595	-0.537
39	臆病だ	-2.149	0.697	-1.061	79	筋が通っている	1.183	0.403	0.135
40	物事を深く遠くまで見通す	0.914	0.729	0.132					

に関して、「憂鬱な」は情緒安定性が高く、「くよくよしない」は低い方向に判断した者(1名)のデータは分析対象から除外し、以後は残りの59名(男子22名、女子37名)のデータを用いて分析を行った。

### 多次元尺度構成法による次元の検討

Big Five 特性からみた『日本書紀』の構造を調べるために、パーソナリティ的どのような次元で構成されているかについて検討を行った。

各パーソナリティ関連語句について、Big Five 各特性における平均評定値を算出し、その値を各語句の「代表評定値」とした<sup>7</sup>。次に、代表評定値を用いて各語句間のDスコアを算出し<sup>8</sup>、これを語句間の非類似度の指標とした。次にDスコアの値をもとに、語句間の非類似度行列を作成し、非計量多次元尺度構成法による分析を行った。

次元数を決定するために、第1次元から第5次元ストレス値と決定係数を算出した(Table 3参照)が、これらの推移などをもとに、3次元解を採用した。各語句の次元値をTable 4に示す。

第1次元は、「41 評判と人望を集める」、「32 徳が高い」「31 才能や地位で人におごらず王者ぶらない」、「33 人々をいたわり養う」「10 立ち居振る舞いがきちんとしている」などが正にあり、「45 凶暴だ」、「44 人の道に反する」、「67 人の道に外れた」、「58 道徳に背く」、「11 暴悪だ」などが負にあった。これらのことから、この次元は「有徳－邪悪(正と邪)」と解釈した。第2次元は、「50 文章や史学を愛する」、「35 学者を好む」、「8 文筆を愛する」、「14 疑い深い」、「26 賢い」などが正にあり、「66 まっすぐで明るい」、「9 心が広い」、「18 人を愛する」、「51 勢いが強い」、「56 愚かだ」などが負にあった。これらのことから、この次元は「典雅－素朴(知と情)」と解釈した。第3次元は、「51 勢いが強い」、「3 威厳がある」、「34 悪賢い」、「60 恨みは必ず晴らす」、「22 悪賢くて誠意がない」などが正にあり、「46 へりくだる」、「64 落ち着いたある」、「61 穏やかだ」、「39 臆病だ」、「72 気が弱い」などが負にあった。これらのことから、この次元は「威圧－萎縮(強と弱)」と解釈した。

### 各次元と各特性の関連について

次に、各次元が各特性とどのように関連するかについて、パーソナリティ関連語句における各特性の代表値と各次元値との相関係数を算出した。その結果をTable 5に示す。Table 5より、第1次元はすべての特性と強い正の相関を示し、第2次元は知性・勤勉性と正の、外向性と負の相関がみられ、第3次元は外向性と正の、協調性と負の相関がみられるのがわかる。

### 『日本書紀』を代表するパーソナリティ特性について

最後に、『日本書紀』の中ではBig Five 各特性のうち、代表的な位置を占めるパーソナリティ特性を調べるために、各特性の平均評定値を従属変数とした対応のある1要因分散分析を行った。なお、各特性はそもそも性質が異なるも

のであるが、ここでは便宜上、各特性は等質という前提で

Table 5 各特性の代表値と各次元値との相関係数

	第1次元	第2次元	第3次元
外向性	.683 ***	-.521 ***	.507 ***
協調性	.936 ***	-.207	-.250 *
勤勉性	.900 ***	.389 ***	-.005
情緒安定性	.960 ***	-.109	-.077
知性	.814 ***	.532 ***	.135

註1: データ数は79。

註2: \*\*\*  $p < .001$ , \*  $p < .05$

評定されたと仮定する。各特性の平均評定値の平均値およびSDをTable 6に示す。

Table 6 各特性の平均評定値の平均値・SD

	外向性	協調性	勤勉性	情緒安定性	知性
<i>M</i>	3.28c	3.28c	3.59ab	3.41bc	3.68a
<i>SD</i>	0.75	1.07	0.86	0.98	0.83

註: 同じ記号が付してある特性の間には有意な差がみられなかったことを表す。

その結果、有意であった( $F(2.5,197.1) = 10.15, p < .001, \eta^2 = .115$ )ので、多重比較(Bonferroni法による)を行ったところ、知性は勤勉性以外よりも値が高く、外向性と協調性はこれらよりも値が低いことなどが示された。

## 考察

本研究は、『日本書紀』から収集したパーソナリティ関連語句について、Big Fiveの各特性をもとに評定を行い、パーソナリティから『日本書紀』の構造を検討することを目的とした。

その結果、『日本書紀』は「有徳－邪悪(正と邪)」・「典雅－素朴(知と情)」・「威圧－萎縮(強と弱)」の次元から構成されていることが示された。「有徳－邪悪(正と邪)」については、『日本書紀』がいわゆる正史であり、統治者のレジイマシー(正統性)を明確にするために、統治者を尊く、反逆者を劣悪に描写する軸が必要であったことの表れと考えられる。また、この次元はすべてのBig Five特性と高い正の相関を示したことから、「情緒が安定し、協調的で、勤勉で、知的で、外向的である」ことが、人としての理想的な姿であることを示していると考えられる。

次に「典雅—素朴(知と情)」の次元であるが、知性や勤勉性との間に有意な正の相関関係がみられ、外向性とは有意な負の相関関係がみられたことから、この次元は、知的で勤勉で、なおかつ抑制的な行動傾向を表していると考えられ、このような行動様式を持つことが、ひとつの理想的な人物像であったと考えられる。このことは、Table 6 にみられるように、知性や勤勉性の評価が高かった(そして、外向性の評価が低かった)ことから窺える。また、方(2003)は、古代の日本が儒教文化を積極的に受け入れ、五経をはじめさまざまな文献を取り入れるなどして、儒教が日本の上層社会の文化教養として重要な内容になったと指摘しており、牧角(2016)は平安時代以前のわが国の中国文化の受容について、遣隋使・遣唐使の派遣の影響を指摘し、聖徳太子の十七条憲法や『日本書紀』自体が中国の文献の引用に基づき、中華文化の全面的な受容から始まったと述べていることなどから、少なくとも当時の支配層において、漢籍(文献的知識)の習得が盛んであったことが窺え、儒教思想の知識や行動様式(知性や勤勉性)が当時のステイタスを確立していたとも考えられる。一方、この対極には、明るさや優しさ、荒々しさ、素直さといった情緒的な要素がみられ、この次元は知性—情念という、人間行動の基本原理を表していると考えられる。

第3次元の「威圧—萎縮(強と弱)」については、社会が力関係によって成り立っていること、とりわけ『日本書紀』は政治史の要素が強く、権力争いに力の強弱が不可欠であることなどが反映されたものではないかと考えられる。

ところで、水野(2009)は『日本書紀』のパーソナリティ関連語句から林(1978)のような対人認知の3次元(社会的望ましさ、個人的親しみやすさ、活動性)が見出されたと述べているが、本研究で得られた3次元と林(1978)のそれを比較すると、「有徳—邪悪(正と邪)」は社会的望ましさに、「威圧—萎縮(強と弱)」は活動性に相当するとみることできるが、「典雅—素朴(知と情)」は必ずしも(個人的に)親しみやすい—親みにくいということを表しているわけではないので、これについては相当しているとは言い難いであろう。

最後に、本研究の問題点および限界について述べる。まず第一に、パーソナリティ関連語句の収集・選定方法であるが、これを著者1人の作業で行っている点である。著者1人の作業であることから、たとえ故意ではないにしても、収集・選定時に著者の主観や恣意が強く影響する恐れがあることや、見落としによるミスの可能性などの問題が考えられる。また、語句によっては前後の文脈を知らなければ、単にその部分だけを取り出しても理解できない場合もあり、その識別を1人だけで行うことは問題が多いと懸念される。これらのことから、収集・選定にあたっては、少なくとも複数の者で行う必要があったと考えられる。

第二に、語句の現代語訳や解釈において、原語のニュアンスが損なわれていないかどうかという点が挙げられる。

これに関する困難な例のひとつとして、「やまとことば」では同じ発音でも異なる漢字が充てられているケースも多く(例、さかし[かしこい]:明達し、聡敏し、叡し、叡智し)、これらのニュアンスの違いを現代語にわかりやすく表現することは難しい。この点は専門家の指導のもとで作業を進める必要があったであろう。

第三に、統計解析上の解釈の問題としては、今回は多次元尺度構成法を用いたが、この分析で求められる次元は数学的には特定の座標軸が意味を持っているわけではなく(市川, 1986)、今回得られた次元には、例えば因子分析における各因子にあるような説明力がないとも考えられ、さらに慎重かつ試行錯誤的に結果の解釈をする必要があったと考えられる。

その他、今回得られた次元の妥当性について、歴史学や文献学などの研究成果との整合性を求める必要もあろう。本研究が目標とした「歴史学のような過去を探求する学問にも心理学が何らかの発見をもたらすことが期待できるかもしれない」を実現するためには、これらの学問領域からの批判や評価を受ける必要がある。また、仮にBig Fiveが「時代を超えた存在」であったとしても、各特性の評価自体が時代の価値観の影響を受けるものであり、その点も考慮しなければならないであろう。さらに、『日本書紀』以外の歴史的文献(正史だけでなく野史なども含めて)や他国・文化における文献などとの比較研究をすることによって、各歴史時期における時代精神の解明のみならず、Big Fiveの通文化性の検証にも役立つ可能性も考えられる。

上記のようにさまざまな問題点を抱えてはいるが、今後は本研究をどのように展開させるかも課題のひとつといえよう。

## 引用文献

- 萩生田 伸子 (2010). 調査年次によるBig Fiveモデル因子構造の際の予備的検討 埼玉大学紀要 教育学部, 59, 171-177.
- 林 文俊 (1978). 対人認知構造の基本次元についての一考察 名古屋大学教育学部紀要, 25, 233-247.
- 久松 潜一・佐藤 謙三(編) (1963). 新版 角川古語辞典 角川書店
- 方 献洲 (2003). 日本における儒教文化の受容について—上代から近世までを中心として— 中国文化研究(天理大学国際文化学部), 19, 19-53.
- 市川 伸一 (1986). 似たもの同士の構造を表現する—クラスター分析・MDS 海保博之(編著) 心理・教育データの解析法10講 応用編(pp. 121-135) 福村出版
- 金田一 京助・金田一 春彦・見坊 豪紀・柴田 武・山田 忠雄(編) (1974). 新明解国語辞典 第二版 三省堂
- 国里 愛彦・岡本 泰昌・岡田 剛・山脇 成人 (2010). Big Fiveモデルと Default mode network との関連—安静時fMRIを用いた検討— 日本パーソナリティ心理学会第19回大会発表論文集, 89.
- 牧角 悦子 (2016). 日本における儒教—その発展過程と特徴— 日本漢文学研究(二松学舎大学東アジア学術総合研究所), 11, 175-188.

- 松村 明(監修) (1995). 大辞泉[第1版] 小学館
- 水野 邦夫 (2009). 『日本書紀』にみるパーソナリティ観—5因子(Big Five)モデルによる検討— 日本心理学会第73回大会発表論文集, 16.
- 村上 宣寛・村上 千恵子 (1997). 主要5因子性格検査の尺度構成 性格心理学研究, 6, 29-39.
- 村上 宣寛・村上 千恵子 (2001). 主要5因子性格検査ハンドブック 学芸図書
- 長澤 規矩也(編) (1969). 携帯 新漢和中辞典 三省堂
- 坂本 太郎・家永 三郎・井上 光貞・大野 晋(校注) (1994, 1995). 日本書紀(一)~(五) 岩波書店
- Shikishima, C., Ando, J., Ono, Y., Toda, T., & Yoshimura, K. (2006). Registry of adolescent and young adult twins in the Tokyo area. *Twin Research and Human Genetics, 9*, 811-816.
- 宇治谷 孟 (1988). 全現代語訳 日本書紀 上・下 講談社
- 和田 さゆり (1996). 性格特性用語を用いた Big Five 尺度の作成 心理学研究, 67, 61-67.

## 註

- <sup>1</sup> 本研究のデータの一部は、日本心理学会第73回大会および第84回大会においてポスター発表された。
- <sup>2</sup> 後述するように、Big Fiveの各特性の名称や解釈は研究者によって異なる。
- <sup>3</sup> 今回は「神」と認識されている存在や外国からの使者・移住者は除外した。
- <sup>4</sup> 本研究において大学院生を調査対象者にした理由については、1)大学生よりも専門的知識を有していると考えられること、2)調査時間の長さに堪えうと判断したこと、などがある。
- <sup>5</sup> 先述したように、Big Fiveの因子名は研究者によって異なる。たとえば、村上・村上(1997, 2001)における「知性」は、「開放性(Openness)」と、「情緒安定性」は「神経症傾向(Neuroticism)(の逆)」と、それぞれ表現される場合の方が多いためと考えられる。本研究におけるBig Five各特性は、村上・村上(2001)に準拠しているため、名称はそれに倣っている。なお、著者は、「知性」と「開放性」、「情緒安定性」と「神経症傾向(の逆)」はほぼ同義と捉えている。
- <sup>6</sup> 和田(1996)では、村上・村上(2001)でいう「協調性」を「調和性」と、「勤勉性」を「誠実性」と表現しているが、著者はともにほぼ同義と捉えている。
- <sup>7</sup> たとえば「1 戦いのかげひきをよく知っている」という語句は、外向性の平均評定値は 4.08、協調性は 3.47、勤勉性は 4.15、情緒安定性は 3.88、知性は 4.80 であったので、代表評定値は(4.08, 3.47, 4.15, 3.88, 4.80)ということになる。
- <sup>8</sup> 「2 か弱(よわ)い」という語句の代表評定値は(2.12, 2.88, 2.98, 1.98, 3.02)であったので、「1 戦いのかげひきをよく知っている」と「2 か弱(よわ)い」の間のDスコアは、 $(4.08 - 2.12)^2 + (3.47 - 2.88)^2 + (4.15 - 2.98)^2 + (3.88 - 1.98)^2 + (4.80 - 3.02)^2$ の平方根( $\sqrt{\quad}$ )である。



A study on the structure of 'Nihonshoki' from the viewpoint of the Big Five Model of personality: In commemoration of the 1,300 years anniversary of the compilation of 'Nihonshoki'.

Kunio MIDZUNO

Abstract

The present study attempted to investigate the structure of 'Nihonshoki' (the oldest authentic chronicles of ancient Japan) from the viewpoint of the Big Five Model of personality. Sixty-eight graduate students (male 24, female 42), who majored in psychology, were asked to rate how high 79 words or phrases related to personality traits, which were selected from "Nihonshoki", had relevance to each Big Five trait (extroversion, agreeableness, conscientiousness, neuroticism, and openness). As a result of the analysis by the nonmetric multidimensional scaling method, three dimensions were obtained. The first dimension was interpreted as "virtue vs wickedness (justice vs evil)". The second dimension was interpreted as "elegance vs simplicity (intelligence vs feelings)". The third dimension was interpreted as "highhandedness vs shrink (strong vs weak)". The first dimension was strongly correlated with all of Big Five traits. The second dimension was moderately correlated with openness and conscientiousness and moderately negative with extroversion. The third dimension was moderately positive correlated with extroversion and modestly negative with agreeableness. It was discussed that 1) the first dimension (virtue vs wickedness: justice vs evil) was needed in order to establish the legitimacy of rulers, 2) the second dimension (elegance vs simplicity: intelligence vs feelings) reflected that having knowledge and understanding of Confucian thought from China were the needs of the time, 3) the third dimension (highhandedness vs shrink: strong vs weak) showed that strength was essential in political power struggles. There were also indicated problems concerning how to select words or phrases related to personality traits, colloquial translation, interpretation of statistical analysis and so on.